

サッカーの話である。中学校サッカー部の外部コーチが、ある日、試合に負けた生徒たちに罰走を命じた。この当時は、指導者が相当の権威をもってチームに君臨していた時代である。そんな雰囲気漂う世相で、指導者の指示に生徒が反論するなどということは思いもよらないことである。

しかし、ものおじせずに「自分たちだけが走るのには納得できない。負けたのは監督の〇〇さんにも責任があるから一緒に走ってくれ」と言った生徒がいた。後に日本代表選手となり、アジア年間最優秀選手賞を2回も受賞した中田英寿氏である。

現役時代の中田選手の試合を何度も見た。なぜなら、私がイタリアにいる時期に、ちょうど中田選手がイタリアプロリーグで活躍していたからである。最初は、ペルージャというチームだった。ローマからさほど遠くはない町だった。ペルージャまで試合を見にいった。多少驚いた。ペルージャというチームは、中田選手中心のチームだった。中田選手のところにボールが集まり、中田選手のパスを起点に攻撃が展開していく。コーナーキックやフリーキックを蹴るのも中田選手だった。

当時は、まだイタリアをはじめヨーロッパプロリーグにおいて、日本人選手は活躍できていない時代である。中田選手も最初から活躍できたわけではないだろう。徐々にチームの中で信頼を勝ち得て、自分のポジションを確立していったのだろう。中田選手を見ていて、気づいたことがあった。倒れないのである。相手が倒そうとしても倒れない。体幹が強いとかフィジカルが強いということもあるだろう。安易に倒れてファウルをもらおうとするプレースタイルとは真逆のスタイルなのである。

中田選手は、ペルージャでの活躍が認められ、ASローマというビッグクラブに移籍した。ところが、中田選手と同じポジションには、トッティというスター選手がいた。どうしても、出場機会は少なくなる。それでも、中田選手は結果を出していった。

中田選手の活躍に合わせたかのように、ASローマがイタリアプロリーグセリエAで優勝した。ローマの街はお祭り騒ぎとなった。そこらじゅうが、ASローマのマークやチームカラーに塗られていった。道路を挟んで、マンションとマンションの間を巨大なASローマの旗がなびいていた。尋常ではない。

あの頃、同じ日本人として、中田選手の活躍が誇らしかった。街を歩いていたり、高速道路のサービスエリアに寄ったりすると、「ナカータ、ナカータ」とずいぶんと遠くからでも呼ばれた。何度呼ばれたことか。恥ずかしいが、うれしかった。

世界の舞台で活躍する原点は、すでに中学時代にあったのだろう。中田選手に、「一緒に走ってくれ」と言われた指導者は、その後、勉強に勉強を重ね、指導者として成長していくことになる。もし、中田選手が現在の日本代表チームにいたらと思うことがある。時代を切り拓いていった中田選手のプレーは、いつまでも目に焼きついている。